

技術移転と産業発展の長期的展開過程

—インドとタイにおけるオートバイ産業と自動車産業の比較事例研究—

大塚啓二郎

先進国から途上国への「技術」移転、あるいは途上国で操業している多国籍企業から国内企業への技術移転が、途上国の産業発展のエンジンであることは広く認識されているところである。しかしながら、具体的にどのような経路を通じて技術移転が実現され、それがどれくらい産業発展に結びついているかについては、説得的な実証分析が行われてきたわけではない。また直接投資（FDI）に関する実証研究では、技術の概念が狭くとらえられており、最近とみに注目を集めている「経営」の重要性は無視されている。

本研究は、インドとタイにおけるオートバイ産業と自動車産業の数年間にわたる企業レベルのデータを用いて、技術移転と産業発展の長期的展開過程について、丹念に究明することを目的としている。

単純化して言えば、従来のFDIの途上国経済への影響に関する研究は、多国籍企業の存在が、技術のスピルオーバーを通じて、同一産業または川上の産業に従事する企業の生産額や生産性にどの程度のプラスの効果があるかを、主にクロスセクションデータを用いて計量経済学的に推定しようとするものである。しかしながら、この種の研究では実態解明をもっぱら計量経済学的な推定結果に依存している。そうしたアプローチで、正確に実態解明ができるとは思えない。例えば、どのような出自で、どのような教育を受け、どのような経験を有する人材が新しい技術を導入し、どのようなビジネスを展開しているのかといった、基本的な動向は計量経済学一辺倒の分析ではわかりえない。またそれがわからなければ、意味ある政策提言はできない。

他方で、より現実を直視しているように思われるグローバルバリューチェーン（GVC）の研究では、概念化が先行し、実証研究が欠如している。実際問題、GVCの研究では実証分析が少ないうえに、あったとしても変数の内生性を無視するなど、分析の信憑性は低い。ただし、GVCの研究ではFDIの研究と異なり、デザインやマーケティングなど、企業活動の本質部分を取り入れている点が評価できる。そこで本研究で

は、FDIとGVCの研究の融合を図りたい。

具体的には、どのような人材がどのようにして技術移転に貢献しているのかを正確に理解したうえで、適切な計量経済学的推定方法を考えたい。そこでは経営者の外資系企業での勤務経験などが重要な変数になるであろう。また、技術移転が長期にわたって行われていることを踏まえ、時間軸の長いデータを用いた分析を目指したい。

現実性のある研究を行うために、本研究では、まず第一に、丹念な実地調査を実施する。そのために、本研究ではインドとタイという2つの国の特定の産業を研究対象にした。オートバイと自動車は隣接分野で類似性があり、企業の生産物や生産方法のアップグレードの実態を、産業間と国家間で比較することに大きな意味があると思われる。それと同時に、GVCやFDIに関する文献を精査し、これまでの研究で何が問題であったかを明らかにする。現時点で判断すれば、これらの分野の研究は政府が発表している二次資料にもっぱら依存しており、必ずしも分析に必要な変数が利用できていないことが問題である。本研究では、どのような独自調査を実施すれば、より現実味のある研究ができるかを、常に念頭に置くことにしたい。次に、理論的に実態を把握し、検証可能仮説を定式化して、パネルデータを用いて検証を行いたい。究極的には、どのようにすればFDIを基軸とした産業発展が実現するかについて、政策的含意を導きたい。

（おおつか けいじろう／アジア経済研究所 新領域研究センター）



インドの街角のオートバイ（三嶋恒平氏提供）